

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649 FAX(03)3299-5367
振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

「反合理化研究会」再構築を

渡邊和彦氏を悼む

金平 博……………2

実態から学び未来を描く……………3

—山形・おきたまユニオンそして第二五回全国交流集会—

精神こわれるまで働けない

—学校が壊れる！教職員が壊れる！子どもが壊れる！—

教員 A……………5

旅はつづく 札幌へ

—松里、木山氏と楽しい語らい—

滝野 忠……………7

正当な理由なし！JALの不当解雇……………9

独占資本と国家独占資本主義 (二)

小林 晃……………11

読者からのおたより……………13

旬刊 社会通信

NO. 1153

二〇一三年一〇月一日号

二〇一三年一〇月一日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

「反合理化研究会」再構築を

渡邊和彦氏を悼む

東京の早田昌二郎さんより渡邊和彦さん死去の連絡を受けたとき、いくつもの助言や激励を与えてくれた私より年上の人たちが、そういう年齢になっている事にあらためて気付きました。

渡邊和彦さんの長い国労役員・活動家としての歩みの中には、いくつもの役割があったでしょうが、私にはやはり国労反合研（反合理化研究会）代表としての渡邊和彦さんが最も印象的です。地方の役員として中央反合研交流会に参加したときも、全国大会期間中の連日の反合研交流会にもいつも代表の席に渡邊和彦さんが座り、国労中央の動きと私達のとるべき態度や方向を提案していたと思います。

あの反マル生闘争以降も国労中央が見せる方針的動揺に対して、常に国労の「戦闘的・階級的」方針を堅持すべく反合研代表として強い指導性を示していました。私しの印象では信頼も厚く、全国的な団結・結束する力は非常に強いものがあつたと思います。

普段は実におだやかな表情を見せる人でしたが、全国大会などでの発言は非常に激しく厳しい内容であつた事を良く覚えています。私達も全力で発言して方針の強化を求めていきましたが、渡邊和彦さんは私達の発言を総括するような形で、情勢を述べ時には激しく、時には静かに本部に迫り方針の補強や修正を勝ち取っていました。全国大会で何度も発言した私しにも短いけれども助言を受けたことを思い出します。

「分割・民営化」反対闘争に続く、解雇撤回の闘いは二四年の長い闘いをえて二〇一年年終結しましたが、この闘争を闘い得た力や思想はまぎれもなく反合研運動にあつたと思うのです。反合研運動の中の議論や学習の力が、中央・地方の役員にとどまらず職場にまで拡がり「一人の首切りも許さない」長い闘いを支え得たのだと思います。

あの修善寺大会で本部方針を押し返し、不採用通知後は不当労働行為と闘い、引き続き解雇撤回闘争を闘った原動力は、もちろん他のグループも努力したのだろうが、その中心は反合研運動で学んだ成果が職場に大きな力を作り出していたのだと思います。

少なくとも私しが知る一九七〇年以降の国労運動の中にしめる反合研運動の役割は大きく、国労運動を作り支える力でもありました。そして、その中心にはいつも渡邊和彦さんがおりました。私しが退職と同時に国労を離れてから二年になりますが、私しの国労組員としての長い活動の中で、渡邊和彦さんを知り得たことは、とても大きな意味がありました。

この十年ほどは会うことも少なく時々集会で挨拶をかわす程度でしたが、渡邊和彦さんの死を聞いて、私しが強く影響を受けた「幾人かの内の一人が亡くなった」事を静かに受け止めています。まるで坂道を転がり落ちるように態度を変えていった役員を見てきましたので、一貫してその姿勢を変える事のなかった人の生き方は好ましい

と思います。

渡邊先輩の反合研代表として挨拶する表情や、厳しい表情で本部を追及する全国大会での姿をなつかしく思い出します。(金平 博・元国労組合員)

実態から学び未来を描く

―山形・おきたまユニオンそして第二五回全国交流集会―

コミュニティユニオン第二五回全国交流集会「山形みちのく集会」が、一〇月一九日から二日間、山形県上山市のかみのやま温泉「日本の宿・古室」で開かれる。テーマは「東日本震災の悲劇を風化させない、学ぼう・つながろう・届けよう、ユニオンネットワークの力で」。受け入れ団体は、山形県米沢市を中心とするおきたまユニオン。実は二年前の二〇一一年、この地で開催予定だった。ところが「三・一一」で開催断念。今回の開催となった。福島から米沢への避難者は最大時六千人、今では二千人弱とのこと。これは、原発爆発が終息したからではなく、「終息しない」、「いつまでも宙ぶらりんでは生命がつけられない」、「判断必要」と、避難者のみなさんが「決断」をせまられた結果に他ならない。

この実態は、政府は福島に「寄り添ってない」の現れである。おきたま集会は、したがって「東日本震災と労働者の現状」「福島第一原発事故・その後の課題」を分科会の柱とする。編集部も参加する。編集部にとって米沢は第二の故郷。山形の秋は「いも煮会」、これっておいしい、おすすめて。案内によれば米沢牛をメインに「焼き肉・芋煮・パーティー」。編集部はこの日をわくわくする気持ちで待っています。お会いしましょう。(編集部)

現状 山形県おきたまユニオンは二〇〇四年三月に三年の議論を経て、結成され、現在二つの地域支部、九分会一職域グループそれに単独加入組合員グループがある。

組合員総数は二八五名。うち二重加盟・サポーター組合員六二名、男性一二九名、女性一五六名という内訳になっていて、女性の比率が高いのが特徴的。

執行委員は一九名、書記一名で専従役員はいない。執行委員は年金生活者OB、サポーターや分会・グループの代表がいない、日常的な相談業務をはじめ諸活動に参加している。連合には加盟していない。

たたかい 組合員の主な職場・職域は、山形社会福祉事業団、知的障害者通所授産施設、学校給食調理、歯科病院、保育所、老健施設、組合書記、その他民間事業所などです。

これまでの主な取り組みとして、次の闘いがあった。

- ・NHKの受信料徴収業務で「ノルマ解消と直接雇用を求める」闘い
- ・派遣労働者「雇用申し込み義務」を派遣先に求める派遣元、派遣先、厚生労働省との闘い(マンパワージャパン、株式会社山形スリーエム)
- ・解雇撤回の裁判闘争、雇い止め阻止の闘い、通勤手当・一時金の支給の支払いを求める闘い(米沢市嘱託職員、学校給食嘱託職員、図書館司書嘱託職員)
- ・米沢新聞社・パワハラ社長に「もの申す闘い」
- ・知的障害者施設の職場民主化の闘い
- ・福祉施設の労基法違反に抗する闘い
- ・コンピュータシステム開発関係の企業での長時間労働解消及び時間外不払い請求の闘い(イーストクリエーション、サンクス、森の子保育園)

- ・一〇〇〇円カット、パーマの闘い
- ・労基法違反、パワハラ等学童保育の闘い
- ・日本で最初の町民駅雇い止めの闘い
- ・警備保障会社不当配転阻止の闘い
- ・資源リサイクルセンター不当移転・賃金切り下げ撤回の闘い
- ・二つの歯科医院雇用と労働条件改善の闘い
- ・自動車販売会社、自動車修理工場、縫製工場労働組合、福祉生協、山形県社会福祉事業団との闘い

特徴的な闘争課題は、「職場の民主化闘争（労基法を無視した使用者の一方的な支配、パワハラなど）」「雇い止めとの闘い」「一時金・退職金などの要求を含む低賃金改善の闘い」などであった。

確執 ユニオン運動で厄介な事は、同じ職場で働く正規職員と、非正規職員との確執である。正規・非正規職員の業務内容が同一で、労働条件の格差が歴然としているとどうしてもトラブルが起こり続ける。怒りの矛先が使用者に対してではなく正規職員に向けられてしまう。

労働運動の展望を考える時、避けて通れないのが正規・非正規労働者の格差問題である。地域型労働組合であるユニオン運動の強化は、既存の企業別組織である産業別労働組合と連携をしていかなければ発展していけない。しかし、今多くの労働組合は企業内の労働者の雇用と生活を守るために苦闘している。

正社員は、企業を守る事が労働者の生活を守ることになるという運命共同体としての役割を果たしながら、派遣労働者や契約社員、請負社員などを受け入れ、格差を是認せざるを得ない状況に追い込まれている。

企業内で働く雇用形態の違う労働者、そして、そこに存在する格差問題は、なぜ働く人たちの共通の要求課題にならないのか。福島原発問題にも共通するところが多い。派遣社員、契約社員、臨時職員、嘱託職員の格差問題は、私たちの正社員の問題ではない。私たちは、試験を受けて努力して入社したし正社員である、非正規は格差を承知で働いているはずである、といった意識が心の隅にないだろうか。

労働運動の課題は、格差の中で働き、差別され続けている人たちと共に闘いそこから学び課題を見つけるしかない。原発事故もそうである。実態から学び未来を描くしかない。ユニオン運動を支え学び、働く人たちの運動を支え学び、働く人たちの生活と権利・人権を守る労働運動を目指そうが問題意識である。

参加を 今年一〇月一九日から二日間、山形県上山市のかみのやま温泉「日本の宿・古室」で開かれる全国コミュニティユニオンの全国交流会の受け入れ団体が、この「おきたまユニオン」である。

分科会は十を数える。どうすればなくなる―職場のパワーハラスメント、メンタルヘルス―休職者の職場復帰と労組の役割、有期雇用労働―改正労働契約法を活用しよう！ つぶさされない組織化―組織化を成功に導く方法教えます等。ぜひご参加を。

精神こわれるまで働けない

―学校が壊れる！ 教職員が壊れる！ 子どもが壊れる！―

「ジジー うぜんだ！」

「しらが キモッ！」

これは、定年を間近にした私が、日常的に子どもたち（小学校高学年）から浴びせられる罵声だ。障害児学級を担当している私が、担任している子どもを交流学習をしている通常学級に連れて行った時に起きる。そして、罵声を浴びせている子どもたちは、私だけでなく障害を持った子へのからかいも始める。「発達障害」を持つ子の反応が面白くてからかっているのだ。それに対して、静かに言って聞かせても、叱っても収まらない。・・・こんな子たちを一発殴ってやろうかと思う私は、教師失格なのだろうか？

文科省はノーマライゼーションに基づく「共生社会・共生教育」を謳っているが、学校の現実には差別社会である。それは、現在の経済状況と過酷な競争社会の中で学校だけがエアポケットではありえないということだ。

萎縮する教師

昨年、大阪の高校で起きた、部活動での体罰と自殺事件に端を発し、文科省は全国の小学校から高校まで保護者・児童生徒を対象にした「教職員による体罰アンケート」を実施した。私の職場では、校長から「アンケート実施の要綱」を示された時「暗い雰囲気」が漂った。何が体罰なのか、懲戒なのか（児童生徒に教師が懲戒を科すことは文科省から認められている。また、具体的なガイドラインは示されてはいるが）はつきりしない。日々、生きて成長している子どもたちと、様々な場面、想像もしないことに遭遇している。その時に、これは体罰、これは懲戒なんて考えていられない。

それがアンケートで「あぶりだされる」ことになったら、今後どう教えていったらいいのか、戸惑い不安になってしまう。それが共通した思いだった。それに、「いじめ問題」と同じで、「指導」と考えての行為が、保護者や児童生徒に「体罰」と受け取られかねない。勿論、体罰を肯定して言っているわけではないが、それほど境界はフアジー・微妙だということである。これに対して、日教組や我が県教組からは何の声明もない。それぞれの個人解決である。

その数か月後に、私の職場では結果が出て、校長が「うちの学校では体罰の訴えはありませんでした。」と報告した時、一様に安堵の溜め息がもれた。しかしその後は、子どもを「お客さん」扱いするような雰囲気が強まり、教師と児童生徒の立場が逆転したかのようである。また、私が子どもに対して強い口調で叱ったり、論じたりすると「あー、体罰アンケートに書こうかな。」などと子どもが「脅す」雰囲気になっている。何という学校になっているのだ。嘆いても仕方ないが・・・。

がんじがらめの職場

そして、いま職場は様々な「説明責任・評価など」でがんじがらめにされている。

息つく暇もない。その最たるものが「職員評価」である。実施手順を見ると、一年中「評価シート」中心に職場が回っているようだ。四月―計画立案(plain) 五月―面談(校長・教頭と) 六月から十二月―実践(do) つねに面談、指導助言を受ける。一月―自己評価(see) 二月―面談 三月―改善計画(improve) などとなっている。一体、誰のための教育か校長のためかと思うようだ。

それと並行して、担任する学級をどう運営するかという「学級経営案」を提出させられる。学級の経営の基本方針、実態、児童生徒の状況、配慮すべき児童生徒などなど、事細かに記述させられて五月連休明けに提出だ。また、「学級運営」ではなく「学級経営」としているところに当局の本音が垣間見える。保護者に対しては「学級経営」からの「教育方針」を示して「説明責任」を求められる。それに「公務員倫理・服務チェックシート」である。年に数回「基本的な規範・ルールを再確認し、今後の行動・倫理保持に活用」目的に提出させられている。

その内容たるやプライベートにまで及んでいて、笑止千万・噴飯ものである。例えば「プライベートであっても、飲酒は少量で済ませ、早めに切り上げ二日酔いなどにならない。」など余計な御世話だと言いたい。私は全く提出していないが、こんなことで精神を擦り減らされている。

管理職の非行が

S市では、こんな状況の中この二、三年で、校長・教頭などの管理職による「セクハラ・公金横領など」の非行が連続して、懲戒免職処分者が一〇数人出ている。これに対して市教委は「非行根絶」のためと「服務チェックシート」の一層の強化と「コンプライアンス職場研修」を実施してきた。

私は、職場研修と市教委交渉で「チェックシートや研修をいくら実施してもなくならない。評価で互いに競争させられている実態、仲間とゆっくり話し合えない忙しさの解消なしには、非行はなくなるらない。」と訴えた。しかし、少数の意見など無視の状況で一向に改善はなされていない。

震災の影響と学力低下

管理職の非行の要因に「震災の影響」を感じずにはいられない。未曾有の震災被害の中で、昼夜の連続勤務を強いられ、一方「避難所運営など」地域との連携で心身ともに疲れきった状況だったのではないか。そして、「震災後の神戸での校内暴力多発の状況を引き起こさないように」と、「生活・生徒指導研修」が強化されている。児童生徒の非行の前に管理職の非行とは、笑えない。

また、全国学力テストの結果が全国下位レベルで、学力向上への対策も考えさせられている。S市では、小学一年生を除く二・三・四・五・六・七・八・九・十・十一・十二学年まで全員が学力テストを受けさせられている。そして、その結果で各学校、各学年ごと学力向上に向けての方策を事細かに要求される。本当にいい加減にして欲しい。

学力に関しても、震災の影響を感じる。東日本大震災は二〇一一年三月十一日発生で、学校は翌一二日から休校になった。学校によるが、そのまま四月一五日ごろまで

多くの学校が休校した。学校が再開しても、学校が避難所になっていたりと、使用できず仮校舎や他の学校へ間借りしたりと、落ち着いて学習できる環境にはほど遠い状況があった。

その状況を無視して、一律に学力を云々することは、子どもたちそして教職員のことを考えていないことの表れである。こんな中で学力向上なんて、できるわけがない。教員も分かっているが、逆らえない。悲しい。

展望も見えない！

ここまで、学校の状況を記述してきたが、全く展望が見えない。私も最早定年である。正直なところこんな職場からさつさと去りたいと言うのが本音だ。なんだ逃亡するのかという声も聞こえてきそうだが、自分の精神が破綻するまでは働けない。

(教員 A)

旅はつづく 札幌へ

— 松里、木山氏と楽しい語らい —

旅は続きます。八月末、「妻に引かれ」て札幌です。天候は不安定、予報は雨マークばかり。この時期、札幌は見るところはありません。期待するのは青空だけです。羽田から飛行機は揺れ続けておりました。「コリヤだめだ」との思いのなか、千歳へ。奇跡です、晴れておりました。飛行場は大雨のこん跡をのこしておりましたから。

北海道がんセンター「がん何でも相談外来」

旅の目的は二つです。一つは北海道がんセンター前院長・現名誉院長で同センターの放射線治療医として四〇年、約三万人を診てこられた西尾正道医師の「がん何でも相談外来」での相談です。これは甲状腺腫瘍と三〇年余格闘し、東海第二原発差止め・廃炉訴訟の原告でもある妻の強い思いがあったのです。西尾氏は、福島県の市民測定室や茨城―千葉を中心とする「関東子ども健康調査」の協力医でもあります。

福島原発は放射性ヨードやセシウム等々を大量に吐き出しました。放射性ヨードやセシウムは甲状腺等に取り込まれ甲状腺がんを引き起こします。当時、枝野官房長官は「直ちに健康に影響ない」と大本営発表してましたが、福島県の「県民健康調査」でも、結果が判明した十九万三千人中「小児甲状腺がんが十八人、甲状腺がんの疑い二十五人」という驚くべき事実。小児甲状腺がんの一年間の発生頻度が「一〇〇万人に一人」と言われているのです。すでに十九人が手術を受けていると伝えられています。

そんな中、「本物のがんvsがんもどき」「抗がん剤は効かない、患者は苦しみ、殺される」「患者はもつと賢くなれ、医者信じすぎな」。医師間の激しい論争が始まりました。出版社は、売れば口だけでなく足も手も出します。今の状況がそうです。

妻の闘病は三〇年前、地域の保健相談所の健診で「大動脈瘤では」から始まりました。体調が優れず二〜三年、大病院内科に通っていたのですが、その「売り」である心研（心臓血圧研究所）へ。誤診の連鎖の始まりです。カテーテルなどさまざま

な検査の結果「血管に富んだ胸腺腫」と。「三時間ですっぱり取れます」とはじまった手術は出血の処理だけに追われ、途中から人工心肺をとり付け十三時間にも。縦隔（左右の肺と胸椎、胸骨に囲まれた部分）に入り込んだ甲状腺腫瘍だったので。

「心研」から代謝外科へ。大きな血管にも癒着し取れなかった腫瘍はリング大。小さくするため、鉛の病棟に隔離され放射性ヨード治療。面会謝絶で二年間に三回も。私もたいへん。妻の友人からは「本当のことを言いなさい」と迫られ、お医者さんは「教科書にない」とおっしゃる。「医者が大混乱しているのに、私にわかるわけないでしょう」「とにかく本人は元気、元気で生きている」と答えるほかありません。こんな状況で、「暴れ出したら三ヶ月」とも言われ続けて三〇年の妻からすれば、「私の治療はなんだったの」との思いが、福島原発爆発、子どもの甲状腺がん多発、そしてがんの専門医たちの論争が、札幌の西尾医師へと変わったのでしよう。

松里さんと木山さん

もう一つの目的は青年時代の懐かしい二人の仲間との再会です。国労では北海道はむろん全国で彼ら二人をしらなければ「おまえはモグリか」といわれる存在の松里福慈さん（名寄出身で元国労青年部長、国労綱領策定の立役者）と木山誠二さん（稚内出身で不正義は大嫌い、思い立ったら直ぐ行動の闘士）のお二人です。

松ちゃんは熊（ひぐま）、木（キー）さんはエゾ鹿を思わせる。国労運動への思いは熱く、共通しています。気持とは階級的労働運動の再生、国労への期待ばかりか実践です。お二人ともに筋を通すガンコ者、それでいて心優しく人一倍気をつかう。

木さんの仕事は今、札幌の老人保健施設の管理人、地域でも組織づくりに汗を流す。松ちゃんは木工製作所で六五歳定年まで働き、今は地域の世話役。今なお「通信」（第一一五二号）にある「国労魂」を維持し続けていらっしやる。たいしたもの。

すすき野

今度の旅も楽しかった。旅はバック、安い。宿は五六〇室ものビジネスホテル、札幌の繁華街すすき野、夕食はなし。なにを食おうか。日曜とあって、閑散、東京とはえらい違います。グルグル一時間余歩き回りました。北海道らしさを感じたのはラーメン、ホルモン、ジンギスカン、すし屋でした。ビックリしたのは全国チェーンの居酒屋が軒を連ね、幅をきかせていることでした。札幌も新宿と変わらない。さびしい、悲しい、これが日本なのです。

どこで夕飯食うか。これきめるの地獄です。すすき野二〜三回、回りに回って、「ココいいかも」と地元の人々が集まりそうな居酒屋へ。正解でした。続々と予約のお客が。明日は松ちゃん、木さんと酒盛りです。北海道らしさを楽しんで…。

翔太郎君

宿に帰ると木さんから電話。「明日は、北海道がんセンターの予約時間に合わせ、車で宿の玄関に行きます」と。「木さん、今日は家族とOB『交流会』、飲んで疲れているのでしように…、朝早くに申し訳ないね」と妻。私「木さんにおまかせよ」

翌朝九時半、宿のフロントへ、木さん。ヤアと手を上げてくれました。「車、ソコ」、運転席に若者が。木さんソックリ、もつとイケメン、木さんも二〇代はじめはこうだったのかな。若者は、「翔太郎です。昔お世話に…」と、すかさず自己紹介。

昔、一五〇六年前です。私、稚内へ、闘争団の関係ですよね、きつと。稚内の駅に翔ちゃん(当時小学一年生かな)が、木さんと見送りに来てくれたんです。これじゃ、お礼しなくちゃいけません。翔ちゃんに、「何が欲しい」、「トミカ的車」。「送る」とはいったけど、「トミカ的車ってなくに」。小さな、優しい、可愛い、そして木さんの大切な宝、翔ちゃんに私の特技「空手形」とはいきません。東京に戻り、さっそく百貨店へ。「トミカ的車ってなんですか」、「おもちゃ売り場へ」。わかりました。ミニカーだったんです。いろんな車種が並んでいます。翔ちゃん何が好きなのか。なんでもいいやと、木さんところにはお嬢さんいた、これもなんでもいいや、てなこともありました。

翔ちゃん、今大学生。そして娘の花香ちゃんは中学二年生。木さん結婚おそかった。四〇代半ばだったか。いい息子と娘に恵まれて…。うらやましい。

酒盛り

夜は松ちゃん、木さんとの酒盛り。場所は札幌駅北口三〇秒の居酒屋「味百仙」。旭川のように迷い子になることはありませんでした。だって、お二人は小林義昭さんとすでに楽しんでますから。この店、友人の北海道新聞記者の義父さん経営なんです。小林さんからは「二〇〇余の銘酒が並んでた。大将(店主)は釣り好き、看板までねばった」なんて連絡。うまかったんでしよう。お二人ともに店の前に立ち、ニコニコ顔で出迎えてくれました。

「どうしたの」「開店は五時」。少し時間あるねと、七〇男が「V」、許される、何十年ぶり、しかも元気元気！「五時だ」と店へ。大将に若大将、女性が三人。店は二〇人で満席、酒好きには好都合、いい店です。「とりあえずビール」とたのんだのに、松ちゃん、松ちゃんらしいな。前号に掲載した論文に関係する諸資料や、西尾先生の「七月札幌講演会」記事等々のコピーをカバンから。「お久しぶり」「これからもね」と乾杯する前にです。いい風景でしょう。

わがかみさん、久しぶり、二〇年前、「岩井章さんと闘争団を訪ねる旅」に参加した時の忘れられない味を再びと、居酒屋に着くや「ポタンエビ、じゃがいものバター煮食べたらい、東京でサンマ高い、サンマもね。私、これ食べたくなって北海道に来たの」、子どもにはしゃいでいます。これじゃ、妻にまかせろほかありません。松ちゃんはJR北海道問題を、木さんは地域づくり、新社会党の地方議員をつくりたいと、身を乗り出し熱っぽく語ってました。楽しかった。おいしかった。

(滝野 忠)

正当な理由なし！ JALの不当解雇

「経営危機」

八月二日福祉プラザにおいて、JALによる不当解雇撤回闘争を闘

う、パイロット組合の山口さんを講師に、支援の意味も込めた学習会を開催しました。参加者は二〇名弱と少ない状況でしたが、余りにも不当な解雇が行われた事が浮き彫りになりました。

円高での損失を飛行機の購入金額に上乗せし、ホテル事業を半値で売却、不要な空港の整備、七四七型機の大量購入など。すべて国策として推進してきた結果の赤字。管財人へは、高額の報酬を払う一方、更生計画は、当初三年と言っていたのに一年で達成したインチキス。官と民の悪い面を合わせた半官半民会社。

結局は、株主を始め（職員も所持していた）株券がゼロにされ、外国の資本にタダ同然で、売り渡されたことが判明したとのこと。

解雇撤回を求めるチラシを配っていたとき、株主から株がゼロになったと文句を言われた時、山口機長も「自分は持株がゼロになった上に、首も切られました」と言ったところ、大変ですぬと言われたとのこと。

安全第一から「利益なくして安全なし」 稲森会長が認めたように、この解雇に合理性はなく、人員削減後に大量の客室常務員を採用するなど、会社に抵抗する労働者（組合役員等）を見せしめに解雇しただけであること。

安全第一というスローガンが、なくなり、気がつくところ「利益なくして安全なし」と言う状況で、安全を優先して迂回すると、何分余計にかかり、燃料費が二〇万円増加するという計算をするようになった。また、肋骨を骨折しているのに、本来は飛行してはいけないが、飛べないと言えないことなど、世界で一番企業が活動しやすいのは、組合が潰された国である。

パイロットは、知識や経験もさることながら、チームワークも大切である。会社が違っても、一〇万人以上のパイロットが連携しており、先行するパイロットは、エアポケットなど、発進の際にわからなかった情報を、後続のパイロットに伝える事を日常的に行って連携してきた。

B七七七 現在四九機が就航している。JALが七機、全日空が一七機採用。今まではジュラルミンの機体であり、ぶつけると傷跡が明確に残ったが、二〇%の軽量化を図るため炭素繊維に変わったことで、ぶついても元に戻ってしまい、X線検査をするまで、キズがわからなくなってしまう。（報告しなくても誰もわからない）

電気での制御など二〇%軽量化したことで、燃料の積み込みも少なくて済むようになった。仮に一〇t余計に積むと燃料の重量分が余計に使うことになる。三〇〇億円が燃料費とすると、六〇〇億円削減できている。

規制緩和の申し子と言われており、整備も朝一回のみでOK。そのため、整備コストが浮くように。また、エアバス機では五ヶ月の転換訓練が必要であるところ、七八七型機は三週間で行けるようになり、ローコストで運用できることが最大の魅力といわれている。

バッテリーの不具合については、リチウムイオン電池とすることで三七kgの軽量化が図れた。電源は始動する時しか必要ないことなど、現場を知る貴重な話しに、納得した学習会となりました。

〔地区労宇都宮〕 1113号

独占資本と国家独占資本主義（二）

一

前回（一）（一一五〇号）の末尾で、現代資本主義（狭義）とは、国家独占資本主義である、と述べておいた。

「資本主義の歴史的発展段階という観点からいえば、一九世紀末、一九〇〇〜三〇三年世界恐慌を転機とする独占資本主義（帝国主義）段階への移行以降、いま現代にいたるまで、広義の現代資本主義と呼んでよいであろう。発展段階を歴史的に特徴づける『経済的・政治的本質』において、この間、基本的に何ら変わらないからである。

ただ狭義には、その中で、大まかにいって一九二九〜三二年世界大恐慌ないし第二次大戦以降、いま現代にいたるまでの局面（小段階）が、国家独占資本主義としての現代資本主義である。」

この国家独占資本主義という用語・科学的概念を、最初に提起したのもレーニンであった。

「ロシアでもやはり資本主義は独占資本主義になったということについては、『プロドローゴリ』（石炭、冶金シンジケート）、砂糖シンジケートその他が、これを十分あきらかにしている。この同じ砂糖シンジケートは、独占資本主義が国家独占資本主義に成長転化していることを、まざまざとめしている。

ところで、国家とはなにか？ それは、支配階級の組織であり、たとえば、ドイツではユニカーと資本家の組織である。したがって、ドイツのプレハーノフらが『戦時社会主義』と名づけているものは、実際には、戦時国家独占資本主義であり、もつと簡単、明瞭にいえば、労働者にたいする軍事的苦役、資本家の利潤にたいする軍事的保護である」（「さしせまる破局、それとどうたたかうか」、『全集』第二五卷、三八四〜三五頁）。

「社会主義が勝利しないならば、資本主義諸国間の平和は、ただ休戦、休憩、新たな国民屠殺の準備を意味するにすぎないだろう。平和とパン——これが、労働者と被搾取者の基本的要求である。戦争（第一次大戦）は、この要求を極度に激化させた。戦争は、もつとも文明的な、もつとも文化的に発展した国を飢餓におとし入れた。しかしそのかわりに、他の側面から、戦争は、大きな歴史的過程として、前代未聞なほど社会の発展をはやめた。帝国主義すなわち独占資本主義へ発展した資本主義は、戦争の影響をうけて、国家独占資本主義へ転化した。われわれは、いまや世界経済のこの発展段階に到達している。そしてこの段階は、社会主義への直接の入口である」（「パンと平和のために」『全集』第二六卷、三九九頁）。

「戦争は、独占資本主義の国家独占資本主義への転化を異常にはやめ、それによつ

て、人類を社会主義にむかつて、異常に近づけたが、これこそ歴史の弁証法である。……国家独占資本主義が、社会主義のためのもつとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義と名づけられる一段のあいだにはどんな中間的段階もないような歴史の段階の一段である」「さしせまる破局、それとどうたたかうか」、『全集』第二五巻、三八六頁)。

二

国家独占資本主義と一言でいっても、その具体的態様は、時期により、国により、あるいは内外情勢の如何により、あるいは政策基調(とりわけ、ケインズ理論、新自由主義など経済政策・イデオロギー)等々の如何により、様々であることは言うまでもない。だが、その基本的・本質的構造、決定的モメント(契機)は、いずれにおいても共通していて、いつでも、どこでも変りない。一握りの独占資本の存在と支配、そしてその国家との緊密な融合・癒着——これである。

先の引用にみられるとおり、レーニンが最初に提起したのは、第一次大戦下の準戦的ないし戦時・国家独占資本主義であり、いわば端緒期のそれであった。これ以降、国家独占資本主義の体制は、一九三〇年代の世界大恐慌下で本格的に定着し、さらに第二次大戦下の戦時期を経て、戦後現代では、いわば平時・国家独占資本主義として、その成熟期ともいふべき——資本主義の矛盾と危機が格段に深まった——段階にいたっている。

史上最初の本格的な帝国主義戦争としての第一次世界大戦必至の情勢を目前にして、大戦にたいする社会主義者・政党の態度をめぐる国際的な大論争が繰り広げられた。だが、大戦が現実には勃発するや、当時、社会主義運動の国際的センターといふべき第二インタナショナルの大勢は、既定方針を放棄して、戦時・統制経済を「戦時社会主義」と規定したり、「祖国防衛」の名のもとに軍事国債・軍事予算を支持したり、戦時「挙国一致」内閣に入閣するなど、雪崩のごとく崩壊していった。レーニンの国家独占資本主義論は、こうした一連の論争の一環として提起されたものであった。

このレーニンの提起を、いちはやく支持し、日本における国家独占資本主義を最初に展開したのが「労農派」であった。明治維新を「絶対主義(封建社会末期の国家・社会体制)の再編」と規定し(「労農派は「不徹底なブルジョア革命」と規定)、これ以降、第二次大戦終了まで「型制」不変を主張した「講座派」には、国家独占資本主義は、まともに分析視点に入りえなかったことは言うまでもない。

ただ当時は、以下の引用文にみられるとおり、概念の内容面は同じだが、用語の面で、国家独占資本主義を「国家資本主義」あるいは「独占国家資本主義」と呼んでいる。なお、引用文中()の箇所は、検閲のため、原文では伏字(×××)となっているのを、筆者の判断で文字を挿入したものである。

「第一次大戦と世界大恐慌による世界ならびに日本資本主義の一般的危機の進展のなかで、……中小工業の急激なる大量的没落の反面において、独占の顕著な発展が顕現した。金融資本制覇の事実、いまや、何人といえども現実の事実として認めざる

をえないのである。

金融資本の発展は、他方では、国家資本主義の強き傾向を現している。現時の金融・財政・関税・産業政策の一端が文字どおり、金融資本によって指揮されていることは、これが歴然たる証左であろう。そして、製鉄合同、電話民営案等一連の合同、民営・官営の諸問題は、本質において、まさしく、巨大金融資本の国家資本との直接の結合による国家資本主義への最も明瞭なる縮図を暴露するものである。」(『労農』一九三一年十月、第五卷第一〇号、「テーゼ」一五〜一六頁)。

「戦後における資本主義の一般的危機の諸モメントは、独占資本主義の諸矛盾・諸対立とからみあつて怖しく尖つてきた。…：独占と競争の併存という独占資本主義の矛盾は、資本家階級の内部に、所有者階級の諸層の間に、国内的にも、国際的にも、火の出るような衝突を引き起こす。

かように、途方もなく激化する矛盾・対立・衝突を何とかして緩和し克服しようとするブルジョアジーの努力——それは無駄な努力だが、——は、必然的に国家資本主義の強化、拡大に導いた。この国家資本主義こそは、独占資本主義の最高・最終の形態としての、独占||国家資本主義である」(猪俣津南雄『極東における帝国主義』三七三頁)。

「独占資本主義の成熟と共に、〈国家〉の役割は変化した。〈国家〉は、ますます階級支配の機関ではあるが、すべてのブルジョアの執行機関というよりはむしろ一握りほどの独占王の利害代表者として機能する。ただし、全社会の生産における巨大な独占資本||金融資本の支配が確立されたことの必然的な現れである。

巨大独占資本の利害代表者としての〈国家〉による強度の経済的統制、国家資本と私的独占資本との結合及び融合、特に資本主義的独占資本における両者の合成、——これら、この国家資本主義の概念の内容である」(同、三七三頁)。

(経済学者 小林 晃・つづく)

◇ 読者からのおたより ◇

徳島三好市長選 残暑お見舞い申し上げます。七月二日、徳島県三好市市長選で反自民候補の黒川氏が当選しました。約二五〇票の差でした。(えひめ・真鍋知己)

編集部より 私が過日、鮎をかけた行った大分県豊後大野市の市長選もそうでした。自民・民主、自治労がおす候補に「市民派」が大勝。くわしくは一一五二号を。

地道に 一つひとつの活動を積みあげ、一人ひとりの仲間をつなぎ、一歩ずつ運動広げます。地道ですが。(埼玉・M)

編集部より 今、必要なのは地域から政治の力をつくる。地方議員ふやすこと。時代は変化する。悔しい。衆院選・参院選と八ヶ月の内に二つの国政選挙。自、公、共には組織力の違を見せつけられました。あとは推して知るべし。革新統一政党の構築を急がないと労働者に未来はありません。とにかく悔しい。(北海道・名寄 S)

編集部より 革新統一候補の構築には、各党の力が必要です。それには地方議員を百倍、千の単位でつくり出す協同行動です。今の状況では、共産党に「一緒に」とはなりません。

町職員 最大月額九%も賃下げ 六月二七日臨時町議会が開催され、町職員の最大9%の給与引き下げが、実質的にわずか一回のみの労使交渉しか行わず、労使交渉ルールを無視した条例が上程、

強行可決されました。町長、副町長、教育長の一〇%の給与引き下げも同時に上程されましたが、まさに「お茶を濁す」ポーズに過ぎない内容でした。

新社会党の鈴木勉町議は、質疑や反対討論で「町職員は、この数年間で四〇人以上人員削減され、多忙化と労働強化で極限状態に追い込まれている。更に大幅な賃金引下げでは、モチベーション低下が必至だ。行政機能の低下を招く」と、約三時間近く質疑を行い、反対討論も行いましたが、新社会党と共産党二人の三人のみ反対。一方、なぜか議員報酬引き下げや定数削減には手を付けず、町職員的生活低下に賛成する議員が多数でした。(埼玉・S)

編集部より ご健闘に敬意です。自治労大会の焦点もそうだった。

原発はいらない 今年の夏は歴史的猛暑であった。しかし奇妙なことに節電キャンペーンがまったく行われなかった。昨年一昨年との違いに驚かされる。原発が稼働しなくても電力は足りていることを証明しているのだろうか。今日、嬉しい電話をもらった。脱原発の関電抗議行動で逮捕された仲間が無罪の判決がなされた。当然だが嬉しい。逮捕する相手が違うと思う。大量の被曝者を生み出し、大地を奪い、海を汚染させ続けている東京電力、御用学者、原発を推進してきた政治家の責任が放置されている。一〇月六日、伊丹で開催される「さようなら原発一〇〇〇人集会」に小出裕章助教と講師の神田香織さんが来られる。成功させたい。参議院選挙が終わり、自民党はいよいよ改憲と労働法制の規制緩和、解雇自由の国づくりに動き始めた。黙っていたら殺される。(JUN)

編集部より 原発推進の先導役のメディアからも「電力不足」の宣伝消えた。東京で一晩中照明照らしているのは都庁のみ。第一庁舎四八階約二五〇メートルのライトアップも。東京ゲートブリッジ、東京スカイツリー、東京タワー、レインボーブリッジでもですって。

大会報告 去る八月二二日と二三日に開催された全国大会に代議員として出席し、発言できる機会を得まして、様々な課題で発言してきました。そこで、別紙のように「全国大会の報告書」を作成しました(大会の概要は同封の機関紙の全国大会特集号で)。一読していただいて特に私の発言内容について批評をしていただければ幸いです。感想を一言「自分の意見を述べる代議員がほとんどいませんでした。」と同時に大会の雰囲気を変える努力がまだまだ足りませんでした。(東京・C)
編集部より お送りいただいた資料、ある会議の時、昼休み休憩ふくめ、数時間余ありましたから、みっちり読みました。なぜ、みんな自分の意見を言わないのでしょうか。執行部答弁にも「己の気持」がありません。あなたの発言「通信」に使いたい。

転居 お変わりなく活動されている事、情報等で拝見しています。先の参議院選、想定していたが自民党の議席増は危険な流れを加速させますね。でも、山本太郎・糸数慶子両氏の当選に勇気付けられました。先日、新潟の小林さんが網走に来て我がユニオンと自治労の仲間とで交流会を行い盛り上がりしました。この度、妻の両親の隣の家に移居しました。将来的な事も考え判断しました。(網走・S)

編集部より 小林さんと大分の赤峰さんを訪問。朝から晩まで河原を駆けまくり今、腰が痛い。
マルエン全集 さてひよんなことから私の部屋にマルクス、エンゲルス、レーニン全集が還ってきました。さつそくマルクスエンゲルスの往復書簡から読みはじめ、わくわくしています。十年の風や雨や雪によくたえカバールの箱が少し日焼けして色あせている程度で中味は全くどうもなく(マル・エンの方)、レーニンは外側含め不死身の状態です。この間ははからずも批判しまくらねばならなくなつた故、宇野弘蔵も一つ良いことを言いました。「『マルクス・エンゲルス全集』を家に置いて背表紙を毎日ながめていても、マルクスエンゲルスと親戚づきあいをしているようなもので意味がある」と、唯物論的にも科学的根拠のある発言と思います。もちろん、十年前までと違って読めばもつといいということです。(しが・I)

編集部より 『マル・エン』全集、往復書簡おもしろいでしょう。

遅れます 厳しい暑さが続いている事と思います。私達も北国の短い夏を謳歌しています。今月の、お楽しみ産直便の件ですが、露地物(富良野産)のメロン遅まきに生育の遅れが出ていて、農家さんから今月中にお届けするのは無理と言う連絡が入りました。申し訳ございませんが、皆様の所へお届け出来るのは一〇日間程遅れ込んで九月七日、八日頃になります。天候不順のせいで、皆様にはご迷惑をお掛けしますがどうぞ、お許し下さい！(八月二日、ユーズカンパニー 鳴海 誠)

編集部より 楽しみはあととっておきます。それにも自然相手のお仕事はたいへんです。

元稚内闘争団の仲間が産直品を月一回五千元で送ってくれます。皆さんもご利用を！

励まされまますね

日中はまだアブラゼミの声ですが、夜は虫の大合唱となりました。新号を過分にお送りくださり、バックナンバーも同封のお手数をかけて、すみません。松里さんに誌上でお目にかかれて、嬉しいことでした。「反動の嵐のなか、大きな勝利」も励まされまますね。(東京・H)